

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 21 日現在

機関番号：12606

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884019

研究課題名(和文)現代における能楽の伝承形態と実践ー外国人能指導プログラムを事例としてー

研究課題名(英文)Noh Training Projects for Non-Japanese People: Noh Transmission and Practice in Contemporary Settings

研究代表者

安納 真理子(Anno, Mariko)

東京藝術大学・音楽学部・助手

研究者番号：80706408

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、国内外における外国人向けの能指導プログラムの実態を明らかにすることを目的とし、参与観察を通じて以下の問いに答えた。どのようなプログラムを採用しているのか、稽古法は日本の伝統的な口頭伝承による方法なのか、西洋の教育法なのか、あるいは新しい方法なのかである。具体的には、Noh Training Project-Tokyo(日本)と、Noh Training Project-Bloomsburg(米国)に参加し、指導者と参加者にインタビューを行った。調査の結果、能の古典的な指導法と西洋のダンスの教授法の双方が確認され、加えて指導者独自の工夫が見られた。成果は学会発表と論文に纏めた。

研究成果の概要(英文)：As Noh is performed overseas, it garners the attention of non-Japanese people who desire to learn the art form. Noh Training Project-Tokyo (Japan) and Noh Training Project-Bloomsburg (U.S.) are programs that have been offering training to non-Japanese people for 20 years.

This research analyzes the programs through fieldwork (participant observation), asking two questions: 1) How is the program organized? and 2) What types of teaching methods are used to transmit the art form from teacher to student? I conduct interviews with teachers and students, gaining insight into their background and teaching philosophy. In these programs, a combination of traditional Japanese oral transmission and Western methods of teaching dance (by breaking it down into smaller units) are applied. I argue that the teacher tailors each lesson according to the student's needs, creating an effective learning environment. Results of this research were presented at national conferences and published in journals.

研究分野：音楽学

キーワード：能楽 能指導プログラム 伝承 教育 参与観察 外国人

1. 研究開始当初の背景

日本における能楽は、観客の年齢層が高くなっている。若年層の観客動員については能楽界も危機感を持って対処しており、能上演の前に能楽研究者や能楽師によるわかりやすい能の解説を試みている。また新作能の創作も心掛けており、虐待など現代社会の問題を題材としたり、若い女性の興味を引くような少女漫画を原作に選んだりしている。その一方で、能楽に興味を持つ外国人は増え続けている。1984年に初めてアメリカ人のジョナ・サルズにより京都のトラディショナル・シアター・トレーニング (Traditional Theatre Training、以下 TTT と略) という外国人向けの能指導プログラムが構築された。現在は、国内外に様々な指導者による能指導プログラムがある。このように外国人向けの能指導プログラムは増えているが、その理由、また教育法や実態についての調査はなされていない。それらを調査することによって、現代における外国人の能楽上演をめぐる伝承の実状を明らかにできると考え、本研究に取り組んだ。

能楽に対する外国人の関心は、近代の比較的早い時期から現れており、アメリカ人の動物学者 E.モースをはじめ、E.フェノロサも観世流シテ方・初代梅若実から謡を学んだことがよく知られている。稽古の様子もモースのスケッチ日記に描かれており (『外国人の能楽研究』法政大学国際日本学センター刊、2005)、梅若実の全七巻の日記にも記載されている (『梅若実日記』2002-2003)。このように能楽は、明治時代から多くの外国人に親しまれてきた。戦後も 1970 年代・80 年代から、外国人が来日して能楽や日本の伝統芸能の稽古に励む姿が多くみられる (井上和博『日本を継ぐ異邦人』1998)。しかしながら 1980 年代になると、外国人が能楽を学ぶことについての学術論文はなく、データの存在も確認できない。さらに外国人を対象とした能指導プログラムについての論文はなく、演者の技術や養成、またそのプログラムの実態については明らかになっていない。

本研究は、報告者の博士論文「英語能の研究——シアター能楽の創作過程を中心——」(2012) の研究成果を踏まえて、そこから生まれ出た問題点と向き合っている。博士論文では、能にインスピレーションを受けた作品、能に取材した作品、能に影響を受けた作品の分類と英語能の定義を明らかにした。さらに能楽全体における英語能の位置づけを述べ、それぞれの英語能団体の歴史や上演活動を整理し、データベース化した。さらに、多くの外国人が関わっている英語能団体「シアター能楽 (以下 TN と略)」の作品と創作活動に焦点を当てた。特に英語能〈パゴダ〉に焦点を当て、舞台上演されるまでの作家・作曲家・演者・演出家の交流と創作過程を 2009 年から追究した。アメリカに加え、シアター

能楽がツアーを実施した東京・京都・北京・香港でもフィールドワークを行い、そこでの活動と観客についての調査結果を博士論文で発表している。アジア・ツアーに同行し、観客の反響やコメントを聞いたことによって、英語能の三つの問題点が浮き彫りとなった。それは、①TN による英語の謡が西洋的なコーラスに聴こえること、②立ち方一人一人の存在感が強く、古典能のようにシテ中心の舞台ではなかったこと、③上演ごとに舞台が演出家によって改変され、練り上げられていくにつれて完成度が増して「演劇化」されたことである。これら三点は、演者の西洋演劇的背景と技術的な面に関連する。その上、「演劇化」された舞台は、演者らが互いの動きと「間 (ま)」をあまりにも容易に読み取ってしまうため、能がもつ「ぶっつけ本番」の緊張感や張り合いがなくなってしまう。つまり、英語能の観客は古典能と比較して鑑賞しがちであるが、特に同じ英語能の舞台を数回観る観客に対して、古典能に比べると英語能には即興的な要素がなく、変化を楽しめないという印象を与える可能性がある。このように能に不可欠な要素が舞台から失われることを避けるためにも、能指導プログラムの実態を明らかにし、これらの問題点が能指導プログラムの教育法で解決できるのか、できないのであればいかなる代替案があるかを考察するために研究を実施した。

2. 研究の目的

本研究は、この国際的でトランスナショナルな時代において能楽が世界で上演されるなか、国内外における外国人向けの能指導プログラム (長期の能ワークショップ) の実態を明らかにすることを目的とした。そのため、どのような師匠がどのように外国人生徒ら学習者に言語的、文化的な壁を乗り越えて能楽を伝承しているかを追求した。また本研究は、外国人向けの能指導プログラムの教育法を比較することによって、それぞれの共通点や相違点を見出した。それにより、能楽を学ぶ外国人に対する指導者の意識が見えると考えた。具体的には、日本の能トレーニング・プロジェクト (Noh Training Project-Tokyo、以下 NTP-T と略) と、アメリカの能トレーニング・プロジェクト (Noh Training Project-Bloomsburg、以下 NTP-B と略) の外国人能指導・養成プログラムの参与観察をし、その教育法、指導者の背景、参加者の反応に焦点を当て、大きく二つの問いに答えた。それは、①どのような指導プログラムを採用しているのか、また②稽古法は、日本伝統の口頭伝承と似通った師匠から弟子へと受け継がれるものか、あるいは西洋的教育法であり、外国人向けに考えられた新しい伝授法なのかである。

3. 研究の方法

本研究は、身体を用いて師匠から指導され

る古典伝承の応用的実践に関する研究を基盤としたため、能指導プログラムが実施される現地での調査を必要とした。このような民族誌的アプローチをとるフィールドワークは、史料調査に偏りがちな能楽研究の分野で現在重視されている。外国人能指導プログラムの創業者にインタビューを行い、目的、活動、指導者や参加者についての情報を収集し、整理した。特にアメリカ人の R.エマート（後述）が指導者を務める国内外の能指導プログラム（NTP-T と NTP-B）に参加し、指導者の教育法に直接触れながら、古典の指導との比較分析を行った。

(1) 平成 25 年度

当該年度は、日本における R.エマートの NTP-T を調査の対象とした。具体的には、創業者にインタビューをして教育法や目的を確認し、能指導プログラムの方針、上演、指導者や参加者について資料の収集をし、他の能指導プログラムとの比較を行った。

NTP-T プログラムは、エマートが 1991 年 9 月に東京において創始した。エマートは、喜多流の仕舞教士の資格をもっている。NTP-T を設立した目的は、日本在住の外国人のために英語で能の謡と仕舞を教授することにある。NTP-T は、週に一回（一回三時間）開催されており、毎週出席する生徒は数人おり、定期的に出席する生徒、外国からプログラムを見学するために訪れる研究者、また外国でエマートから能を学び、日本に短期滞在して稽古を受ける学習者もいる。NTP-T は、時期によって学習者の数が異なり、また指導者の都合によって稽古の回数変動することもある。

報告者は、10 月からエマートの NTP-T に加わった。これは、報告者が海外の NTP-B（後述）に行く前に、エマートの教育法を身につけ、かつ古典の伝承と比較分析をするベースを整えるためだった。NTP-T への参加は、資料収集と実践研究の一貫として本研究の期間中続けた。

調査を予定していた他の二つの国内能指導プログラムは予定が合わず、見送った。サルズの京都における TTT は、平成 26 年度の NTP-B と時期が重なってしまい、参加できなかった。金剛流シテ方・宇高通成の国際能楽研究会（International Noh Institute、以下 INI と略）も京都にあるが、多くの稽古場で教える宇高と報告者の予定が合わず、調査が成立しなかった。

(2) 平成 26 年度

前年度に整理した国内の能指導プログラムの目的と教育法に関する知識を土台とし、当該年度は海外の能指導プログラムに参加した。また前年度と同じく、エマートの国内 NTP-T に出席し、訪れる外国人の養成方法を考察した。対象としたプログラムは、米国の NTP-B だった。

NTP-B は、エマートの NTP-T に 1992 年から 1993 年の六ヶ月間、日米友好基金の奨学金で日本の古典芸能を学びにきたアメリカ人の E.ダウドが、1994 年にエマートと共に始めたものである。ダウドがエマートの NTP-T に参加し、アメリカでも似たようなプログラムを作ろうと試みたのが、NTP-B である。この能指導プログラムは、夏に三週間開催され、日本からの能楽師を招き、薪能や稽古を行っている。このプログラムは、能楽に興味を持ちながらも日本に学びに行くことができないアメリカ人などが能を学ぶために作られた。日本以外で集中的に高いレベルで能の稽古を受けられる機会は、NTP-B の他にはない。またこのプログラムは、演劇界において有名であり、アメリカにおける能楽研究家やアジア芸能に関心がある演劇家は、必ず一度は出席している。

平成 26 年度の NTP-B に焦点を当てたのは、二つの理由がある。一つ目は、NTP-B が 2014 年 7 月 14 日から 8 月 2 日まで創立 20 周年を記念したプログラムを 8 月 1 日と 2 日に実施することが予定されていたからである。この祝賀に際して薪能の半能（高砂）と能（羽衣）が上演される予定だったが、雨が降ったため薪能ではなく、アルバイナ・クラウス（Alvina Kraus）演劇場の中で上演された。これらの舞台に向けての稽古と教育法を参与観察した。なお二つ目の理由は、能一番に向けての稽古は、発表会の上演に向けての稽古と異なると考えたからである。なぜなら能一番を上演するには、自分が担当する詞章や立ち位置を覚えるのだけではなく、相手の詞章や立ち位置を把握しなければならないからだ。この準備において、指導者がどのように様々なレベル（初級、中級や上級）の演者を教育するのか、またどのような役・役割を割り当てているのかも考察した。

報告者は、NTP-B には地謡の一員として参加し、準備の過程や稽古の流れを体験することができた。インタビューもエマートの他、NTP-B の創業者、初級レベル謡・仕舞担当の指導者と、初めてプログラムに参加した生徒と三年間もイギリスから通い続けている生徒に対しても行った。これらを通して、それぞれの観点から見た NTP-B の目的や活動、役割や意義が明らかになった。様々な側面からプログラムの実態を分析し、教育面から浮き彫りになった点は、指導者も生徒も西洋の背景を持つ方が多く、言葉のやり取りが多いことであった。技術は、見様見真似だけで伝承されるのではなく、楽しい雰囲気や質問や会話を交わす、効果的な稽古が見られた。

エマートが指導者であり、NTP-B から形を受け継いでいる英国のレディング大学の能トレーニング・プロジェクト（Noh Training Project- United Kingdom、以下 NTP-UK と略）にも参加する予定だったが、科研費（研究活動スタート支援）に申請した予算額より交付予定額が少なかったため、参加することがで

きなかった。

4. 研究成果

(1) 本研究課題の成果は、二つの発表、論文と報告書に纏めた。学会大会発表としては、第64回東洋音楽学会大会(2013年11月10日)で「新作能の創作過程と「演劇化」と題し、能指導プログラムに通った演者や現在も通っている演者の活動について一部発表した。英語能〈パゴダ〉に出演している演者は、NTP-TやNTP-Bに参加しているが、その場から去っても技術を上達させる必要がある。そのためには、独自で稽古をしたり、他の能愛好者・専門家と共に練習したり、日本に来て師匠に稽古をつけてもらうなどの努力をし、技術を磨くことが不可欠であることを述べた。NTP-Bの多くの参加者は、アメリカ在住であるため来日は難しいが、英語能のレベルや能指導プログラムのレベルを上げるには、一人ひとりの努力が求められる。調査の結果として、短期間のNTP-Bの実態や教育法を変えても、英語能の問題点の「演劇化」は解決しないということが明確になった。もう一つの発表は、日本音楽交流会主催で『世界における日本の古典音楽——海外の目から見た——』(2015年3月10日)という文化交流をテーマとするパネルに招待され、ここでも英語能の紹介した「国境を越えた英語能」の発表を通して能指導プログラムの問題点を明らかにした。

論文は、能指導プログラムの指導者として活躍されている喜多流シテ方・松井彬の活動や指導法について英語で執筆した。松井は、世界的な演者や演出者と共演している。そのコラボレーションとアプローチ、また外国人との国際交流を通して学んだ知識が松井の能指導に現れている。松井は、言語と文化の壁を乗り越え、学習者をイメージの世界へと導き、能の場면을言葉と身体を用いて表現していた。外国人には好評な教育法だった。

(2) 研究成果の国内外におけるインパクトは間違いなくある。このトランスナショナルな時代において、能は外国人の興味を惹いている。そのため、外国人が能に興味を示した時に、これらの能指導プログラム自体があることと、研究の蓄積があることは世界に能のことを伝える機会となると考える。具体的に、報告者の学会大会発表と招待発表には、多くの参加者が見られた。学会発表の質疑応答の場では、質問やコメントが絶えず、能指導プログラムやその演者の活動に興味を持たれていた。さらに、『世界における日本の古典音楽』のパネル発表に続いたディスカッションも、観客からの反響もよく、報告者に対しての質問も多かった。双方とも、英語能という歌舞劇が存在していることを知らなかったことが、観客の質問のきっかけになったと考える。さらに英文の学術論文は、国際的な

*Asian Theatre Journal*に掲載され、日本音楽交流会の日本伝統音楽シリーズの報告書は、日英両言語で書かれているため、多くの人々が読むことができる。

今までは、能指導プログラムについて書かれて学術的な論文はなく、さらに参与観察した視点から書かれた文献は全く無い。これらの発表と論文で、20年間も継続してきた能指導プログラムに、光を当てることができたと期待している。また本研究は、研究者自身にもインパクトを与えた。2014年のNTP-Bに参加して以降、能の伝承をよりよく理解できるよう、能の稽古(金春流太鼓と喜多流謡・仕舞)を玄人能楽師から受け始めた。今後も、能の稽古を続ける予定である。

(3) 今後の展望は、NTP-TとNTP-Bの他、国内外の外国人向けの能指導プログラムの参与観察をする予定である。今回の科研費(研究活動スタート支援)は申請した予算額より交付予定額が少なかったため、イギリスのNTP-UKに参加できなかった。しかし、平成27年から申請した科研費(若手(B))を用いてNTP-UKに参加する予定である。さらに、国外は宇高が主催しているイタリアのINIと、ポーランドで松井彬が指導している「緑蘭会」にも参加する。国内は、前述のサルズのTTTと、宇高のINIにも訪問する予定である。

研究成果は、ヨーロッパにおける能指導プログラムの情報と、本研究で収集した能指導プログラムの情報を比較し、日米において口頭発表や学会誌への投稿を行い、積極的に両国の研究者に公開する。具体的には、日本音楽教育学会で発表し、その学会誌『日本音楽教育実践ジャーナル』に論文を投稿する。外国の学会発表は、Society for EthnomusicologyとInternational Council for Traditional Musicで行い、論文は*Ethnomusicology*に寄稿する。

報告者は、これらの実践を通して得た古典の基礎知識と実技習得経験を研究の土台とする。さらに報告者は、アメリカで育った日系アメリカ人であり、日本語と英語のバイリンガルである立場から、日本とアメリカの文化と社会の狭間に立ち、両国の文化の国際交流を発展させることも目的としながら日米で能の伝承やワークショップに励む予定である。本研究の学術的な特色は、外国人能指導プログラムの実態を明らかにし、外国人が演じる能の問題点の解決法を探るために、教育方法に注目した点にある。調査に基づいた解決法の提示を行うことで、本研究は今後の外国人による能上演の改良にも貢献できると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

①安納真理子、「国境を越えた英語能——そ

の魅力と問題点——』、『世界における日本の古典音楽——海外の目から見た——、報告書』（新しいパースペクティブによる日本伝統音楽シリーズ VI）、日本音楽交流会、査読無、2015年、26-29、32-36、39、93-94、98-102、105頁。（日英訳）

② Mariko Anno, Judy Halebsky, “Innovation in Nô: Matsui Akira Continues a Tradition of Change,” *Asian Theatre Journal*, vol. 31, no. 1, (2014): 126-152.

DOI: 10.1353/atj.2014.0028

査読有

〔学会発表〕（計2件）

① 安納真理子「国境を越えた英語能——その魅力と問題点——』、『世界における日本の古典音楽——海外の目から見た——』（招待講演、パネリスト）、日本音楽交流会、2015年3月10日、紀尾井小ホール（東京都千代田区）。

② 安納真理子「新作能の創作過程と「演劇化」——シアター能楽の英語能〈パゴダ〉を事例として——」、第64回東洋音楽学会大会、2013年11月10日、静岡文化芸術大学（静岡県浜松市）。

〔図書〕（計1件）

① Kazue Sekine, Translated by Mariko Anno, Mari Saegusa, and Fumiko Konoe, Tokyo University of the Arts, *Szymon Goldberg Collection Catalog*, 2015, 1-266.

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

http://www.geidai.ac.jp/labs/onken/index_eng.htm

6. 研究組織

(1)研究代表者

安納 真理子 (ANNO, Mariko)

東京藝術大学・音楽研究科・助手

研究者番号：80706408